

一 般 演 題 抄 録

3. 当院における膜性腎症の臨床経過について

山口茂樹 内木義人 武田敏也 米川 智 坂口美佳
岩本一郎 田中久夫 長谷川廣文 今田聰雄 堀内 篤

近畿大学医学部第3内科学教室

当科で経験した膜性腎症52例（特発性44例，二次性8例）について臨床的に検討した。1975年10月から1996年3月末迄に腎生検を実施した糸球体疾患581例の膜性腎症の頻度は9.0%であった。平均年齢は45.3歳，性別は男性29例，女性23例であった。発症から腎生検までの平均期間は48.1か月で，腎生検後の観察期間は52.6か月であった。病歴上の発症様式は無症候性蛋白尿が44.2%で残りは緩徐なネフローゼ症候群を呈した。観察中に25.0%がネフローゼ症候群へ移行し，最終的に80.8%がネフローゼ状態となった。診断時26.9%の症例に顕微鏡的血尿を認めたが，肉眼的血尿を呈したものはなかった。高血圧症を25.0%に合併していた。ネフローゼ症候群の

症例に対してステロイド剤及び免疫抑制剤が投与されたが，短期間治療群，長期間治療群とも，治療効果に有意差を認めなかった。5年以上経過観察しえた症例のうち29.2%が完全寛解I型，29.2%が不完全寛解II型，25.0%がネフローゼ状態を継続していた。5年以上の経過で腎機能の悪化を認めた症例では，腎機能正常の症例と比較し腎生検時，光顕像で糸球体絛系壁の有意な肥厚と小動脈内膜の肥厚及び間質の線維化を認めた。又，腎機能低下群では有意な血圧の上昇を認めた。従って予後因子としてこれらの組織学的変化及び高血圧の合併が重要であると考えた。

4. 癌告知に関する心身医学的検討

大石光雄 中島弘徳 川合右展 吉田 誠 澤口博千代 本多宣晴 村木正人
田中 明 藤田悦生 南部泰孝 東田有智 長坂行雄 福岡正博 中島重徳*

近畿大学医学部第4内科学教室

*近畿大学ライフサイエンス研究所

目 的

癌告知に関する心身医学的検討を加え，癌臨床における取組みの一端を知ろうとした。

対象ならびに方法

同意をえた当科通院または入院中の患者102（男67，女35）名，本学医学部学生171（男132，女39）名，本学付属高等看護専門学校生293名の総計566（男199，女367）名に対し，当科にて作成した癌告知についてのアンケート調査を行った。また，その一部については心理テスト（SDS，STAI，TEG）を行い，告知希望の有無との関係を検討した。

成 績

(1)「癌告知希望」は，全対象では男性79.3%に対して女性72.5%で，わずかに男性が女性を上回っていた。一方，「告知非希望」は，わずかに女性が多かった。(2)年齢との関係は，女性が非希望で有意に高年齢であった。男性での関係は明らかにできなかった。(3)告知希望の有無と心理テスト成績との関係は，男性のSDSが非希望で有意に高値を示した。(4)告知

希望理由では，「残りの時間を有意義に」，「闘病への積極的参加」，「気持ちの整理，覚悟」，「隠されたくない」，「家族への配慮」などが上位を占めた。また，実務的な理由として「癌保険への加入」があった。一方，告知非希望理由は，「絶望」，「抑うつ」，「不安」，「恐怖」などのほか，とくに，若年女性にみられた「だまし続けてほしい」は特徴的と思われ，女性心理の一端を示すものと考えられた。(5)以上より，癌の告知に際しては本人の告知希望の有無の確認は当然ながら，一方的な告知であってはならず，また，患者心理への配慮が求められるところから，初診時の告知希望調査とともに，SDS，STAIなどの心理テストの併用が有用と考えられた。

結 論

癌告知についてのアンケート調査と心理テストとを行い，希望の有無と心理テスト成績との関係を心身医学的に検討し，癌臨床における取組みの一端を明らかにしえたと考える。